



情報のゴミ・ゴミの情報 (3)

個人情報からなる  
巨大ヴァーチャル・タイムマシン  
について

受け取った電子メールに返信する際、元のメールの文章を自動的にコピーしてくれる機能が無造作に使う人がいる。そのため、必ずしも必要ではない元のメールが添付されたままだったり、さらにはその元のメールまでついていたりすることがけっこうある。これは汚いばかりか、インターネット資源の無駄ではないのか — というのが、「サイバースペースのゴミ」論議の発端だった。もう1年近く前の仲間内の話である。それは当然のことながら、インターネット上に日ごとに蓄積される情報は宝の山か、それとも膨大なゴミの堆積でしかないのか、という問題に発展した。

🔗「ヴァーチャル・タイムマシン」

情報の価値は、それを必要とする人次第である。ある人にとっては、何ものにも代えがたい貴重な宝ものでも、他の人にとっては、それこそ無用のゴミに等しい。だからインターネット上の情報は、「空中に浮かぶチリ芥のようなもので構わない」と私が言うと、1人が、「そのゴミこそが宝の山なのだ。現代の考古学者が古代人の骨片や食器のかけらなどを集めながら古代人の生活を研究するように、将来の考古学者は、現代のデジタル情報のかけらを収集し、それを分析しながら、現代人の思想と行動を研究するだろう」と言った。情報は何でもいいから、とにかく、どんどんデジタル化したほうがいい、だからデジタル情報にゴミはないのだと。それを受けて、もう1人が「それらの情報を1カ所に集めて、時間軸で切ると、ヴァーチャルなタイムマシンができる」と、鋭いことを言った。ここでゴミ問題は、様相を一変したわけである。

みんなが自分の見るもの、聞くものをデジタル化して記録して、サイバースペースに蓄積すれば、たしかにそこには巨大なデータベースができあがる。私が住む町の日々の出来事が、商店街の活気から観光客の表情まで、そっくり記録され、いつでもそれを再生して見るこ

とができるわけだ。

そのとき、私の頭に浮かんだのは「サイバーマン」のことである。

これは、ウェアラブル・コンピューティングの研究および実践の先駆者として知られるトロント大学の Steve Mann 教授が、MIT メディアラボの学生時代から手がけてきた「実験」で、彼は身に多くのセンサやコンピュータをまとうて (図-1)、自分が見たもの、聞いたもの、触れたもののすべてをデジタル化して記録する作業に没頭してきた (当初は頭にくりつけられていたカメラは、今ではメガネに組み込まれるほどに小型化した)。

だから、仮に私たちすべてがサイバーマンよろしく、より小型化し、高機能化した電子道具で武装して、四六時中、日々の出来事を記録し、それをネットワークで結べば、全地球規模のデータベースが出来上がる。それを時間軸、あるいは空間軸で切り取れば、私たちの生活の昨日を、1年前を、さらには10数年前を、くっきりと蘇らせることができるようになるはずだ。

そうなる、サイバースペースには、メールの重複といった例を別にすれば、無用なゴミはほとんど存在しない。地上のゴミのデータも含めて。

🔗「マイライフビッツ」と「ライフログ」

実際、この種の生活記録を保存しようという動きが、最近にわかに高まっている。

故人のデジタル映像をおさめ、法事のたびに生前の姿を蘇らせようというオンライン霊園構想などはかわいいうほうで、米マイクロソフト社が進めている「マイライフビッツ (MyLifeBits)」というプロジェクトは、まさに個人のデジタル・データベースをつくらうとする試みである。自分が読んだ本、撮った写真やホームビデオ、閲覧したウェブページ、送受信した電子メール、買い物した商品の領収書、さらには電話の会話など、日々の生活の主要部分をデジタルで記録し保存しようとい



図-1 「サイバーマン」 (<http://www.cbc.ca/cyberman/> から)

うものだ<sup>1)</sup>。

ヴァーチャル・タイムマシンは、もはや手の届くところまで来ている。

ところで、技術の用途は、常に多様である。生活を便利にするための道具が、生命を危機に陥れるためにも使われる。民生用に開発された技術も軍事用に転用されるし、逆に軍事用に開発された技術の多くが民生用に利用されている。

マイライフビッツは、個人の生活を監視する道具へと容易に転化するだろう。

実際、米国防総省は「ライフログ (LifeLog)」という名の新規プロジェクトで、より徹底した試みを始めようとしている。「マイライフビッツ」といい、「ライフログ」といい、ともにライフ (生活) という言葉を使っているのが興味深い。また発想の根底に Vannevar Bush の構想した思考マシン「メメックス (Memex)」を置いているのも共通している)。

紹介記事によると<sup>2)</sup>、ライフログ計画は「個人の生活にかかわる、ありとあらゆる情報を収集し、索引を付け、検索可能にしよう」というもので、「送受信した電子メールから撮影した写真、閲覧したウェブページ、通話、視聴したテレビ番組、読んだ雑誌に至るまで、とにかくすべての行動が含まれる。そうした情報は、さまざまなソース — 個人の行き先を突き止める GPS 送信機、目にしたものや会話を記録する視聴覚センサ、健康状態を監視するバイオメディカル・モニター — からかき集めた情報と結びつけられる」のだという。

私たちの生活を徹底的に監視、追跡しようという研究がすでに大真面目で遂行されているのである。喧伝されているユビキタス・コンピューティング時代が本格化し、街頭のポスター、看板、電柱、あるいは屋内の天井、壁、机、さらにはメガネ、靴、書籍、衣服といった身の回りの製品にまで、小型チップのコンピュータが埋め込まれ、それらがネットワークを通じて交信するようになれば、データの入力もまた自動化されて、ヴァーチ

ャル・タイムマシンは巨大化するばかりだろう。

そのヴァーチャル・タイムマシンを、権力者が一手に握る事態が目前に迫っているともいえよう。そこでは、著作権とか、個人の肖像権とかいった問題は、ほとんど考慮されていないように思われ、私たち一人ひとりが、ゴミのように扱われる恐れもある。一方で、「権力に監視されるなら、こちらでも権力を監視しよう」と、民間団体が権力を監視するシステムの構築も進んでいるらしい。これもまたデジタル・データベースをつくることに結びつくわけで、ヴァーチャル・タイムマシンをめぐる新たな戦いの時代がやってきた。

「監視し返そう」という発想は、権力の監視を防ぐのはもはや不可能だという認識から出発しているともいえる。こういった事態は私たちに、もはや監視のシステムから逃れられないのではないか、言いかえれば、あらゆる個人情報をデジタル化されることを阻止、ないしは拒否することはもはやできないのではないかという恐れを抱かせる。

たとえば2003年8月某日に、ある人が某町某通りを歩いている。追跡してみると、某々と会って、某所に入っていた、ということまで検証できてしまうわけである。そんなところに自分の映像を記録されたくない、と多くの人は思うだろう。テロを計画している人間の独特の行動がどうしてパターン化できるのかはよく分からないが、国防総省などは、まさにそういったデータを蓄積することで、テロ対策や犯罪防止に役立てるつもりらしい。

いったんデジタル化され、サイバースペースに蓄積された情報は決して消すことができず、現実世界のように、自然に減衰したり、風化したりして、時間がたてば忘れられることもない。だとすれば、そもそも個人情報をデジタル化されることを拒否できてよさそうである。夏井高人・明治大学教授は「個人情報をデジタル化させないで放置してもらうことを求める権利」を早くから提唱しているが<sup>3)</sup>、こういった素朴だが、基本的な問題をあらためて真剣に考えるべき時点に私たちは立っているともいえよう。

データベースから消えた私は、結局のところ、この世に存在していなかったことになるのかもしれないけれど……。

参考文献

- 1) マイライフビッツ・プロジェクトに関しては、マイクロソフト社のウェブページ参照。 <http://research.microsoft.com/barc/MediaPresence/MyLifeBits.aspx>
- 2) ホットワイアード：あらゆる個人情報を記録する米国防総省の新プロジェクト (<http://www.hotwired.co.jp/news/news/culture/story/20030521202.html>)。
- 3) 「デジタル化されない権利」については、拙著「インターネット術語集」(岩波新書、2000)「匿名」の項参照。夏井説については夏井高人「ネットワーク社会の文化の法」(日本評論社、1997)参照。  
(平成15年7月16日受付)